

県女創立105周年記念同窓会

桑高同窓会長 西羽 晃

県女（三重県立桑名高等女学校）創立105周年記念の同窓会が2013（平成25）年10月17日に、桑名シティホテルで開かれて、私も招待され挨拶をさせてもらった。80～90歳代100人が出席する女性パワーに圧倒される感じであった。思えば、この年代は戦前・戦中・戦後の激動の時期に女学校に通われた年代である。1年ごとに体験が違っている時期である。

1936（昭和11）年の修学旅行は、従来と同じく関東方面であるが、横浜に替わって横須賀へ行き、戦艦「三笠」を見学している。さらに東京では靖国神社に参拝し、遊就館を見学しており、軍事色が濃厚になっている。

37年にはバザー利益金を「第二女学生号」飛行機献納資金として送金している。同年には薙刀の授業も行われるようになった。入学希望者が増えてきたため、従来の定員150人から38年度には200人に増やしたが、その後も希望者は増える一方であった。

41年に太平洋戦争に突入し、男子は戦場にとられたため、銃後を守ることが女学生の大きな使命ともなって、軍人家庭の手伝いに行ったり、農繁期に託児所を開設したりしている。食糧増産のために田畑の開墾をしている。男子不足を補うために、教員・医師・薬剤師へ進学するものも増えてきた。

軍事優先のための輸送事情で、楽しみの修学旅行は41年に中止となった。しかし42年には修学旅行の代わりに、宮城（皇居）外苑での草取りなどが目的で東京への旅行が実施された。それ以後は旅行は実施されなかった。

物資も不足し、38年の新入生から制服は実質的に廃止となって、まちまちな

服装となったが、それでも県女のシンボルである、スカートの白線1本は付けられていた。さらにはスカートも禁止となり、モンペが標準服とされるようになった。そんな中でも43年2月にはオペラ歌手佐藤美子を招いて音楽会を催している。

44年には「学徒動員」が実施され、学校へ行かずに工場へ通う毎日となった。三菱航空機（旧東洋紡績）・ワシノ航空機（旧諸戸タオル）・山本合金（現山本重工業）・日立製作所（現日立金属）・東洋ベアリング（現NTN）などへ通勤した。45年3月に卒業した生徒は、そのまま動員先で勤務を続けた。

45年7月17日未明に桑名は空襲に見舞われ、県女の校舎も全焼してしまった。焼け残ったのは奉安殿と門の石柱のみであった。同年8月15日、日本は敗戦となった。校舎が無くなった県女は、近隣の焼け残った建物を求めて転々とした。

45年8月から、専明寺（東方）、最覚寺（川越村）、国民学校（＝小学校、神田村・在良村）、46年は光輪寺・法雲寺（川越村）も加わり、47年には東芝工場・真光寺（朝日村）、辻内工場（在良村）などが使われた。この47年には義務教育の新制中学校が発足し、小学校の卒業生はすべて新制中学校へ進学し、旧制の女学校では1年生の入学生は無くなった。

48年5月に県女は廃止となり、在校の4、5年生は新制の桑名高校へ移籍された。3年生は地元の新制中学校へ移籍された。県女の新校舎は益生に建設されていたが、この校舎は新制の明正中学校に明け渡された。

冒頭と同窓会に集まった人たちは、このような激動の歴史をくぐり抜けてきた人たちであった。衣食住が不足した青春を生き抜いた逞しさが、今もって元気の源になっているのだろう。